未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 7月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長　日高　大司郎
令和６年７月１日発行

寄り添うということ

何年か前に、重松清の「卒業」という本を読みました。この短編小説の一番初めに掲載されていた「まゆみのマーチ」という作品を読んでいて、うかつにも涙してしまいました。今日は、この物語のお話から始めたいと思います。

主人公は、４０才の男性。母親が危篤になり、病院に駆けつけるところから物語は始まります。彼は、この里帰りで実の妹と久しぶりに再会します。主人公は、学校に行けなくなった子どもを抱えています。息子が通夜や告別式に出られない理由を伝える形で、妹にその息子のことを話します。妹は、小学生の時に、ある理由から学校に行けなくなった経験があるのですが、妹も、その当時のことを兄である主人公にはじめて語ります。

～本文より～

母は決して、まゆみの先を歩いたりはしなかった、という。「ずーっと、うちと並んで歩いてくれたんよ。うちが途中で歩けんようになったら、おかあちゃんも立ち止まって、うちがまた歩き出すまで、並んで待っててくれた。」僕は・・・違った。亮介に何度も「がんばれ」と言った。玄関の外で亮介を待ちかまえて、「さあ、ここまで来い。がんばれ、お父さん待ってるんだから」とも言った。間違っていたとは思わなくとも、そうではないやり方もあったのかもしれないと、いま、思う。

「おふくろ、ずっと歌ってたのか、『まゆみのマーチ』」「うん、信号待ちだろうがなんだろうが関係ないんよ、家を出たあとはずーっと～略～」

まゆみが好き、好き、好き、まゆみが好き、好っき！まゆみが好き、好き、好き、まゆみが好き、好っき！まゆみが好き、好き、好き、まゆみが好き、好っき！

「うち、おかあちゃんも好きやし、おとうちゃんのことも好き。うち、おかあちゃんに一生かかっても使いきれんほどの『好き』を言うてもろうたけん、それがあったけん、どげんつらいときでも元気出せたけん・・・～略～」

親や先生は、自分が正しいと疑わず、子どもに接してしまうことがあります。しかし、それは時として、子どもに寄り添っていないこともあるのかもしれません。この小説の、「ずーっと、うちと並んで歩いてくれた」という部分が胸にささりました。以前お話しした、自分の学級がうまくいかなくなったときの子どもたちの顔が浮かびます。その顔を思い出すと、いつでも自身への問いが蘇るのです。果たして自分は・・・・、子どもたちに寄り添えていたのだろうか、このお母さんのように、「好きだよ」のメッセージを送り続けられていたのだろうかと。

みなさんは、どうでしょうか。寄り添えているでしょうか。「好きだよ」のメッセージを送り続けることができているでしょうか。

小説ではあるけれど、子育ての中で、教育の中で、本当に大切にしなければいけないことが書かれている気がしました。「子どもの心に寄り添うこと」そして「好きだよの気持ちを伝え続けること」です。言い換えればそれは、「ずーっと、子どもと並んで歩く」ことなのではないでしょうか。引っ張るのでも、ぐいぐい後ろを押すことでもなく、彼らの、子どもたちの歩みに合わせて、一緒に並んで歩くということ。

ここで改めて皆さんにお伝えしたいのは、「好き」という気持ちは、どんな状況のわが子であっても、揺らがないということです。いたずらをしたって、友だちとけんかをしたって、何度言っても言うことを聞かなくたって、「あなたのことが好きよ。」が伝わらなければなりません。親が「そうあって欲しい子ども」を愛することではないのです。ありのままの、不出来でわがままで未熟なわが子を、そのまま、まるごと掛け値なしに愛すること。それこそが、本当に大切にしなければならないことです。

丸ごと愛するとは言っても、もちろん悪いことをしたら、きちんと叱らねばなりません。言ってきかせなければなりません。それでも、子どもたちが「自分は愛されている。」「僕は、失敗も間違いもするけども、これでいいんだ。」「私は、生きる価値がある。」と思えなければならないのです。どのように、叱りますか。難しいことではありません。簡単です。必ず「したこと」を叱りましょう。そうしてしまった「子ども自身」を絶対否定しません。「だから、あなたはだめなのよ。なんで何度言っても分からないの。本当に嫌になる。」なんて言ってしまったら・・・、子どもと一緒に歩くことになりません。急がず、何が悪かったのか、どうすべきだったのか、子どものペースで話すべきです。そして、最後にギューと抱きしめてください。それでも愛していると、皆さんの愛情を表現してほしいのです。